

# ピエール・エルバール、その作品と ゲイ文学としての位置づけ

森 井 良

## はじめに

ピエール・エルバール（1903～1974）という作家について我々はどれほどのことを知っているか。活動家、ジャーナリスト、文学者という三つの主要な肩書き（ミラケン）の周囲には、時に「反体制派」「アウトロー」「快樂主義者」、そして「闘士」という勇ましげな属性がつきまとう<sup>1)</sup>。こと外見と人柄においては「抗しがたいほど魅力的な」ダンディ、晩年までその魅力を保ちつづけ、存在じたいが虚実の境を飛び越えた文字どおり小説的人物であり<sup>2)</sup>、他方でその名はジャン・コクトー、アンドレ・ジッド、アルベール・カミュといった同時代のフランスの文壇を代表するビッグネームと宿命的に結びつき、もっぱら彼らの「付き人」と見なされる向きもあった<sup>3)</sup>。

こうした規定は一定の事実に基づきながら、作家を伝説化すると同時に矮小化するものでもあり、じつは生前からエルバール自身が意識して抗してきたスティグマの集積だったともいえるわけだが、我々としては、近年になってそれらを払拭とはいわないまでも相対化するような新たな機運が高まっていることに注目したい。作家の死後二度目のリバイバルに数えられるこの動きは、独立した純然たる文学者としての正当な再評価、それに伴う作品と業績の全体像の捉え返しをなすものであろう<sup>4)</sup>。じつ98年から三年のあいだに主要作品の大半を含む九点の著作がガリマール社のコレクションから再版され、ひきつづき他からも出版点数が追加されていくなか<sup>5)</sup>、2014年にはジャン＝リュック・モローによる初にして浩瀚な通時的評伝（『ピエール・エルバール、清貧の誇り』）が上梓され<sup>6)</sup>、その後塵を拝するがごとく、さらに頁と巻を費やして作家と〈大文字の歴史〉との関わりに注視した伝記

の試みが2017年からアラン・モレーヴの手によって続けられている<sup>7)</sup>。

原著の復刊と実証研究の充実に賦活され、テキストの内部に立ち入った研究もさかんである。フィリップ・ベルティエによる、アカデミックな文学研究の場において初めのまとまったエルバール論（『ピエール・エルバール、軽快のモラルとスタイル』、1998年）は、「階級脱落者」「旅人」「連帯者」「孤立者」「恋する者」といった作家の多様な人物像に沿った基本的なテーマ系をほぼ網羅的に差し出しているまなお貴重なのだが<sup>8)</sup>、この基礎的にして総括的な研究以後、影響関係<sup>9)</sup>、文体・語りの構造<sup>10)</sup>、文学の参照と書物の表象の重要性<sup>11)</sup>などを問う個別研究がさまざまな論者によってなされている。そのなかで我々がとくに注目したいのは、エルバールにおける同性愛の主題、そしてフランス内外の同性愛文学史、あるいはゲイ文学と一般に呼ばれるジャンルのなかでの作家の立ち位置の問題である。

たしかに「同性愛者」という属性はこの作家に付加されたなかば公式のアイデンティティとなっている<sup>12)</sup>。そのうえで件の主題・問題はエルバール研究においても重要項目として考察され、また個別の作家研究を超えた、同性愛と文学の関係性をめぐるより一般的な研究においても部分的に取り上げられてはいるのだが、いずれも扱う対象作品に限られ、同じジャンルの担い手と目される作家たち——たとえば、初めて親交した作家で同じ趣向を分有してもいたコクトー、長年秘書として連れ添った精神的父であるところのジッド、同性愛とアンガージュマンとの関わりにおいて類比的なジャン・ジュネ——との作品上の連関に迫りきれない憾みがある。我々としてはこうした先行研究の穴を逐次埋めていきたいと考えているが、本稿はその序説として、日本では未だ知られざるエルバールの経歴と作品の紹介も兼ねつつ、この作家におけるホモセクシュアリティの主題の争点と射程を示すものとなるだろう。

## ピエール・エルバール、人と作品

さて、ここで作家の経歴を簡単にさらいながら、我々にとって必要な情報を整理してみよう<sup>13)</sup>。ピエール・エルバールは1903年、フランス北部ノール県の港湾都市ダンケルクに生まれた。祖父は造船会社の経営者で地元の名士、かたや御曹司の父は会社を継ぐはずであったが、エルバールが五歳のとき突如相続を放棄し、母とも離婚して、自ら「階級脱落者」として放浪の道を選ぶ（こうした出自と家庭事情——北仏の風土、水夫の多い土地柄、自由

とアナーキズムを体現した父とその不在、母との愛憎半ばする固着的関係——は、作家の原風景をなす重要な要素であり、作品のなかで幾度も変奏されるテーマとなるだろう)。家の貧窮により学業を諦めたエルバルは、単身パリへと上京し、電機メーカーの出版部に就職するも、作家になる夢を捨てきれず、芸術家志望の若者たちと交遊。やがて兵役でモロッコに赴き、仏領北アフリカの実情を見聞きして「抑えがたいほどに反植民地主義者」<sup>14)</sup> となって復員すると、憧れだった詩人ジャン・コクトーの知己を得る。終生逃れられなかった阿片との本格的な付き合いが始まったのもこの頃である。1929年、コクトーの招きでココ・シャネルが所有する南仏の別荘に向かい、詩人に会いに訪れたアンドレ・ジッドと偶然の邂逅。当時のジッドの驚嘆は親友であったマリア・ヴァン・リセルベルグ（ベルギー新印象派の画家テオ・ヴァン・リセルベルグの妻）の以下の証言に伝えられている。

彼〔エルバル〕は熱狂的な存在であり、地獄の魅力をもっている。けれどそこにいる者すべてを誘惑してしまった〔…〕。彼には悪い一面があるが、耐えがたいという意味のものではなく、意図して悪い一面であり、ある種の内なる悪魔のようなものだ。むしろ彼からは特別な詩情が発散されており、ローレイの眼差し、藻のような目、水夫の奥まった目を持ち、仕草は偉大な気高さをたたえ、体は修行僧とっていいほどに痩せて、まるで紙やすりにかけたかのようだ。彼は完全に自然体で、まったく真率さを備えているのだ！<sup>15)</sup>

ジッドにとって自身が「最も宿りたいと願う容姿を備えている」青年との出会いは<sup>16)</sup>、自らの創造した人物と現実で遭遇するという稀有な体験でもあった。ふたたびマリアの証言によれば、「彼〔ジッド〕はエルバルがラフカディオを演じればいいと思っており、他の演者を想像することすらできず、もしそういった場合が生じて、必要なら本人に命ずるつもりらしい。たしかなのは、ひとたびそうした類比関係が成ってしまうと、もう二つの人物像を引き離すことができないということだ！」<sup>17)</sup> ここでエルバルが『法王庁の抜け穴』（1914年）の主人公と同一視されているのは、一方の若さと美貌、英雄的行動力、無償性だけでなく、他方のホモセクシュアルとしての肖像をも裏づけているようで興味深い<sup>18)</sup>。以後ジッドとの縁が急速に深まるのだが、じっさい処女小説の執筆に取りかかったエルバルは、1931年、ジッドの取りなしにより『放浪者 *Le Rôdeur*』をガリマール社から刊行。その数

日後には、ジッドとのあいだに婚外子をもうけたエリザベート・ヴァン・リセルベルグ（テオとマリアの娘）と結婚し、同性愛者を自認する者たちが集団で子供を養育するという「ホモペアレント性」の先駆をなすジッド的家庭の一員となる<sup>19)</sup>。

第二の故郷となる南仏プロヴァンス地方のカブリに夫婦で移住したこの年、活動家としてのキャリアもまた始まっている。女性ジャーナリストのアンドレ・ヴィオリスとともにインドシナへ取材旅行に赴き、帰国後、共産党に入党。その三年後には「革命に奉仕する文学」の実践として連作長編『命令破棄 *Le Contre-ordre*』を発表し、やがて決意してソヴィエト連邦に活動の拠点を移すと、ポール・ニザンの後を継いで『国際文学 *La Littérature internationale*』の編集長に就任。翌年、すでに共産主義への共感を表明していたジッドを手引きしてそのソヴィエト訪問を実現させるが、帰国後にジッドがスターリン体制への批判を含んだ『ソヴィエトからの帰還』をものしたため、筆禍の予防とフォローに追われることになる（内戦のさなかのスペインへ党の密使として赴き、アンドレ・マルローと会談したのもこの一件をめぐってだった）。一九三九年にはジッドと連れだつて再びアフリカを訪れ、仏領西アフリカの搾取状況を告発した『ニジェールの悪弊 *Le Chancre de Niger*』を発表。まもなく勃発した第二次世界大戦で祖国がドイツ占領下に置かれると、対独協力強制労働に抵抗した青年たちを国外へ逃す手助けをし、その流れで抵抗運動に挺身するようになる。1944年、国民解放運動からブルターニュ地方の組織代表に任命され、コードネーム「ル・ヴィガン將軍」として暗躍、レンヌの政権交代と解放に寄与した。戦後は体制側に移ったド・ゴールを初めとする抵抗運動家の傲岸と私益追求に憤慨し、ひきつづき反体制を掲げるジャーナリストとして活躍。解放後初の日刊紙としての『フランス防衛 *La Défense de la France*』の発行に携わり、アルベール・カミュ主宰の『戦闘 *Combat*』に多くの論説を寄稿したほか、国際文化情報誌『人間の土地 *La Terre des hommes*』を立ち上げ、自ら編集長を務めたりもした。

四十年代末にはジャーナリズムからも撤退し、1951年に後ろ盾のジッドが死ぬと精神的・経済的苦境に陥るが、この時期の文学への回帰が後に代表作と評される作品群として結実する。離島の感化院における少年たちの反抗を夢幻とも思える元看守の記憶の混沌のもとに描いた『アルキュオネ *Alcyon*』（1945年）、自身の恋愛遍歴を率直かつ詩的に物語り、その「純粋性」をカミュから激賞された『黄金時代 *L'Âge d'or*』（1953年）、同時代の〈歴史〉

に立ち会った活動家としての遍歴を回想しつつ政治的大義に対する本質的事柄の優位を結論づけた『力線 *La Ligne de force*』(1958年)、幼年時代の家族との関わりから青年期のアフリカ体験までの記憶を虚実ないまぜの筆致で再創造した『想像的記憶 *Les Souvenirs imaginaires*』(1968年)などがあり、いずれも後の論者たちが認めているように、小説、自伝、エッセイ、どのジャンルにも完全には還元しえない、「オート・フィクション」の先駆的作品といえるだろう<sup>20)</sup>。晩年は妻との離婚、経済的困窮、片麻痺の発作など相次ぐ危機に見舞われ、1974年、再び戻った南仏カブリにて、同居していた若い青年に看取られながら死去。過去作の短編を集成して再版した『秘密の物語集 *Histoires confidentielles*』(1970年)が生前最後の著作となった。

以上のようにエルバールの人生は政治参加と文筆活動の往復からなり、その拮抗は世界と自己との対立の構図と重なりながら作品のモチーフならびに主題ともなっているわけだが、ここで二つの圏域を貫くものとして彼の感情生活、すなわちそこで大きな比重を占めていたはずの、同性愛があったことを指摘しておかねばならない。いわば〈私〉と〈公〉を繋ぐ同性愛の役割は、自己の実人生を基にした小説だけでなく、純粹に虚構性の強い物語や、「参加の文学」に属するイデオロギー色の濃い作品にも見出せることだろう。以下、作家において「幸福な愛」であると同時に「災厄」でもあったこの関係性の様式について述べていこう。

## エルバールと同性愛

エルバールのセクシュアリティとはどのようなものだったのか。先述したように、彼は二十八歳のときにエリザベートという女性と結婚し、二人のあいだには、生後まもなく歿したとはいえ、血の繋がった子供もいた<sup>21)</sup>。こうした決して無性的ではない夫婦生活のかたわらで、フランス内外の同性の若者たちとの交際があったわけだが、彼のセクシュアリティないし性的アイデンティティを考えるうえでより注目すべきは、結婚以前の、「愛する存在」の原像をなす少年たちとの関係性である。『黄金時代』はそうした少年たちとの出会い・蜜月・別れを語り手の現在の感慨を交えて回想した私小説であり、その冒頭には、異性愛に対置された「幸福な愛」の存在、ならびに彼自身の欲望の指針がほのめかされている。

十六歳のころ、僕は女の子が好きだった。僕は美しかったから、彼女

たちはちゃんとそれに応えてくれた。そうした日々は、向こうの快樂とこちらの快樂が似通っていないことに僕が気づくまでつづいた。この発見と、女についての知識を伝授しようとする哲学クラスの同級生の努力のおかげで、僕はすっかり気詰まりになってしまい、この気詰まりは、後の幸福な愛 amour heureux との出会いによってでしか解消されないはずのものであった。ピント合わせや、享樂のテクニクといったようなものは何であれ僕をぞっとさせる。この分野にかんして、天啓を受けたのではない不自然なやり方を聞くと、悲しい気分になってしまう<sup>22)</sup>。

この後に「僕の華々しい女性遍歴に敬愛の念をもって倣ってきた」後輩の少年アランとの一夏の交際が語られるのだが、男女の性愛における快樂の不均衡と異性愛規範の抑圧に対する気詰まりを解消してくれた「幸福な愛」とは、まずこの少年との関係性を指すと見て間違いないだろう。じっさい二人の関係性は古代ローマの詩人「ウェルギリウスの詩に出てくる恋人たち bergère が男の羊飼い berger であること知った」ことで認証され、この古典的な男性同性愛の表象の「模倣」によってより大胆な「愛の表現」を獲得するにいたる<sup>23)</sup>。つまり文字どおり異性愛の後に来てこれに取って代わった同性との「愛」は、遡及的に、「ピント合わせ」の必要のない内発的で自然な直接無媒介の欲望の発露と同定されるようになるのである。語り手はこうした差異から同一性への道筋を次のように総括している。

彼〔アラン〕との付き合いで僕を魅了したのは、その心地よさが恋の馬鹿げた駆け引きの時間と引き換えに得られるようなものではなかったということだ。ミミ・パンソン〔1888年のアルフレッド・ミュッセの同名小説のヒロイン〕のような田舎の娘たちを相手にした華々しい二年間は、僕のなかですさまじく退屈な思い出として残っていた。ブルジョワジーの娘たちにかんしていえば、僕が彼女らの寵愛を得たのは、僕に若い自分の男らしさを恥じるころがあったからだ。じっさい、彼女らのささやかな感傷の昂りに耐え忍んだり、打ち明け話に耳を傾けたり、夢を共有するふりをしたり、<sup>ねが</sup>希いに同調したりする必要はなかったのではないか？ 慈愛の心によって、僕はひどい苛立ちや、喉元にこみあげる笑いや、嗚咽や、もやもやを必死に封じこめる……。顔を真っ赤にして、彼女らの「愛」に絡めとられる感覚におびえながら、いったい何度逃げをうったことだろう……。アランと付き合うことで、僕は粗野でもものも

のしい男の子の世界を取り戻したのだった。僕らは対等だった——つまり対等な者どうしで、愛しあっていた<sup>24)</sup>。

先の引用箇所の内容がここではかなり掘り下げられている。異性愛の後に来てこれを補正した同年の同性との付き合いは、エルバル的主体にとって、異性愛以前の原始的で固着的な「世界」に回帰し、「男の子」としての同一性を回復する機縁として規定されるのである。つまりは性的指向のみならず、ある種の性自認が問題とされているのであり、セクシュアリティとジェンダー双方の領域の自己同一性を一挙に獲得させる「対等な者どうし〔の〕愛」は、放浪する孤立者の自己形成という教養小説的結構をもつエルバルの作品世界において、特権的な時空をなすものとなろう。じっさい『放浪者』を初めとする大半の作品にこの関係性は見出せるのだが、前述の「欲望の直接無媒介性」から作家の愛する男性の「タイプ」と「セクシュアリティ」のあり方を析出したフィリップ・ベルティエによれば、件の「同士愛 *compagnonnage*」には、「特異性のなかに閉じ込められることの苦しみから免れさせるのではなく、それを分身と共有することで強固なものとする」ねらいがあるという<sup>25)</sup>。また、他者（＝異質な他性としての女性）との困難な交渉を課してくる異性愛に対して、「同性愛的な同士愛」は「自分のあいだ〔…〕、自分とともに、自分のうちにいつづけるやり方」として現れるともベルティエは指摘している<sup>26)</sup>。個人間の絆だけでなく、彼らが巢食う場所すなわち作品の舞台の島嶼性をも踏まえた重要な指摘だが、いささか内にこもった排他的側面を強調しすぎるきらいがあるかもしれない。たしかにエルバルの同士愛は、〈他〉から〈同〉への回帰を聖化した侵しがたい結界の謂いではあるものの、より実質的な、また欲望の消費だけに回収されない、生の共有による連帯の一形式としてもあるのではないか。それは外的権威との対峙やアンガージュマンの切迫性ととも表面化してくるはずだが、次にそういった同士愛の共同体としての側面に着目してみよう。

## 「同士愛」のコミュニティ

エルバルの作品には社会の下層・周縁に息づく青年たちが多く登場する。階級脱落した主人公ないし語り手が彼らのもとへ降りていく場合もあれば、同じ境遇をかこつ彼らどうしが身を寄せあう場合もある。いずれにせよ、彼ら（と）の親密な交際は互いの同一性を確認しあう「同士愛」の基礎とな

るべきものだが、新たに注目したいのは、そこに秘められた共同体への志向にほかならない。たとえば共産党入党後に発表された『命令破棄』には、該当するカップルがいくつか登場するが、なかでも最も例証的なのは同じロシアの船艦に「見習い水夫 castor」として乗り合わせたアンドルーシユカとヴァシルである。頑健ながら小心な前者と、船乗りとしては先輩の后者は、同じく十四歳という特権的な年齢で、ともに船上の抑圧的な生活に耐えながら、やがて次のような契約的關係を結ぶにいたる。

二人の少年はほどなく、よくある子供の友情の一種によって結ばれることになったが、あまりに奥深く、あまりに軽やかなあの友情は、遊びや、共謀関係や、もはや大人の男たちには味わえない思想と感覚の同一性からなるものである。あの友情は、大人たちの傍らで花ひらくとき、契り pacte となる。そこには独自の合言葉、暗号の言語、埋めるべき升目がある。あれはすべての大人の男たちを騙し、欺き、たぶらかすために築かれたものなのだ。その発展が非常な巧妙さによってつかさどられているため、男たちは自分らが被害を受けたことにまったく気づかない。彼らの傍らに築かれた世界、彼らのよりも残忍で、詩的で、甘美な世界によって被害を受けたわけだが、もし彼らがあの世界に入りこんだとしたら、たちまち迷子になってしまうことだろう<sup>27)</sup>。

二人の「友情」には、先に見た「対等な者どうし〔の〕愛」以上の広がりがある。前景化されているのは年齢・社会的身分の低い被抑圧者たちが「契り」によって「共謀関係」を結ぶ政治的ヴィジョンであり、「思想と感覚の同一性」に支えられた秘教的かつ本質的關係は、搾取側の大人たちへの秘められた反抗の基盤となっている。じじつ二人は「反抗への固い決意」を時に大人たちに取り入る「柔軟さ」で賦活しながら、隙を見て彼らの支配から逃れ、寄港の際にはその土地の「他の少年たち」と「彼らの言葉を知る必要がないままに」交遊する<sup>28)</sup>。ここでも内閉性と外向性が二つながら維持されていることに注意しよう。やがてこの「友情」は抑圧と不安が高まるにつれ「連帯 solidarité」と名指されるようになり、他方で「個別に救済を求めて〔…〕それを得るためなら相手を売り渡す構えを見せ、「自分たちは同じように似た者どうしで、一方が感じたものはすべて、他方も被ってしまうという、小暗い感情」に囚われ、時に「反抗心を一切欠いたような絶望のなかで一種の諦観」を呈しもする<sup>29)</sup>。こうした揺れの状態——反抗の潜勢力として〈他〉

への志向をはらみながら個別的で融合的な〈同〉の世界への郷愁を捨てきれない趨勢——は、後に見るように、エルバールのアンガージュマンに対する両義的な態度、すなわち「政治的なもの」と「本質的なもの」との葛藤が映し出されたものと捉えなければなるまい。「参加の文学」を標榜する『命令破棄』は前者に舵を切っているため、見習い水夫たちもまた最終的に「プロレタリア」の自覚を持ち、自らを「コミュニスト」と名乗るにいたるのだが、我々としては、そうした彼らの政治参加の契機として性愛の発露があることを指摘しておきたい。船から脱出し、コルシカ島へ流れ着いた二人は、製材所で働くも新たな監督者（ロシアから亡命してきた不具の偽将軍）の手中に落ち、甘んじてその折檻を受けつづける。

「接吻しろ、ならず者！ 接吻しろ！ 接吻しろ！」

「接吻」ごとに、将軍は自身の傷跡をアンドルーシュカの顔に押しつけていた。ついには押し退けた。少年の頭が床にぶつかっていった。重苦しい呆然自失が叫び声の後につづいた。将軍は義足を付け直していた。アンドルーシュカは床に倒れて生気のないままだった。血が頬を伝っていた。さきほど将軍に転がされた場所に、ぺたんと座りこむヴァシルは、自分の顔を両手で覆っていた。[...] 突然痙攣のような震えでヴァシルの肩が揺れた。彼は四つん這いで友のもとへ赴き、両腕で相手を抱きしめると、その口に長い接吻をした<sup>30)</sup>。

明らかにサド＝マゾヒズムの顕れであり、「虐待者と犠牲者のあいだの奇妙な共犯性」が言われていることから抑圧／被抑圧の政治的図式だけでは捉えきれないクィア性の顕著な場面なのだが<sup>31)</sup>、ここで二人の少年が被る抑圧・搾取に性的な次元が含まれていたことを想起しなければならない。二人が乗り合わせた「アレクサンドル皇帝号」において船長から見習い水夫が女の代わりになると言われ、そのことへの恐れが彼らの「同士愛＝連帯」のきっかけをなしていたからである<sup>32)</sup>。結局船上では性的搾取は行われず、二人のあいだにも性愛はなかったわけだが、新たな支配者のもとでついに恐れていた状況しめつたが出来ると、それに対抗するように同士愛が性愛の様相を帯びてくる。抑圧者からの接吻の強要という烙印ステイグマを打ち消すようなヴァシルの接吻は、少年どうしの純粹で本質的な世界を取り戻す／させる行為であり、同時に権威への反抗を決定づける機縁でもあるだろう。じじつこの後に彼らは仲間の助けを得てマルクス主義に開眼していくわけだが、こうした転

向、すなわち〈私〉から〈公〉への移行をホモセクシュアリティが繋いでいる点を見逃してはならない。

同性愛の発露がアンガージュマンの契機となる趨勢は<sup>33)</sup>、否定によっても証明される。つまり一方が拒否されれば他方も退けられるという事態であり、これは『アルキュオネ』の少年たちの身に起こったことにほかならない。戦後すぐに発表され、レジスタンスの青年たちと戦死者たちへの作者の想いが滲むこの作品において<sup>34)</sup>、プロヴァンスの農家の息子である十六歳の語り手は、感化院から奉仕活動で駆り出されてきた同い年の少年ファビヤンと出会う。やがて後者から逃亡の計画を持ちかけられると、二人して無人島へと渡り、三歳年上のリノの援助を受けながら生活を共にする（まさしく同志愛のコミュニティの再演であり、語り手のリノとファビヤンに対する密かな愛がほのめかされる）。二人は島を探検していくなかで、「反逆者 rebelle」という碑文を彫られた少年たちの墓地を発見し、彼らがかつて島にあった感化院の囚人であったこと、そして元看守がいまも島の外れにひとり暮らしていることを知ってしまう。あるとき「渡り鳥の群れ」を見てかつてないほどの「隷属感」と「自由が喪われる感覚」を覚えた語り手は、島から逃れる決意をするが、一方のファビヤンは死んだ「反逆者たち」への奇妙な連帯から——「奴らの仇を討ちたくないか？」——島に残るよう友を慰留する。二人が夜を共にする場面では、次のような二重の意味でのせめぎあいが繰り広げられる。

彼〔ファビヤン〕は身震いし、一気に寝返りを打った。〔…〕僕が手を差し出すと、彼は掴んできた。そのことは彼の夢を弾ませたにちがいない。彼は戦い、走り、卑劣な連中や煮えきれぬ奴らを罵っていた。森に火をつけ、追手の攻撃を耐え忍んだ。隠れる者となり、死体の見つからぬ者となり、熊のように、爪をすっかり剥き出しにして、永遠に泳ぎつづける者となった。彼の顔をのぞきこみながら、僕はその戦いの各場面を追っていた。狼のように追いつめられた少年たちに対して、僕は胸が張り裂けんばかりの愛情しか感じていなかった。彼らを虐待する者たちを罰したいと思いながら、初めての共謀関係を彼らと結んでいた。ファビヤンとはといえば〔…〕、ついてくるのを強いるためとでもいうように、腕をこちらの体にまわしてきて、自分の体のうえに僕を転がした。眠りの奥底で、彼は僕の肌からあの恥と呵責の匂いを嗅いだのであろうし、それは汗のように彼のうちに染み渡ったにちがいない。彼が僕を乱

暴に押し戻すと、その瞬間から、二人のあいだに壁のようなものが立ち  
はだかった<sup>35)</sup>。

同志愛から連帯、そして反抗の機運へと、『命令破棄』の見習い水夫たちがたどった道筋がなぞられているわけだが、『アルキュオネ』の語り手とは  
いえば、最終的な踏ん切りがつけられず、アンガージュマンの誘いを拒否して  
しまう。そのことを彼らにしかわからない非言語的な符牒で読みとった  
ファビヤンもまた、欲望の秘められた「愛情」の表現を退ける。つまり二重  
の拒否によって築かれた「壁」とは、いわば「政治的なもの」と「本質的な  
もの」という二つの指針の分水嶺なのであり、後者の側からすれば、ホモ  
ソーシャルからホモセクシュアルへと跳躍し、より深い同一性を回復する幸  
福な機会が永遠に失われたことを意味するのである。同性愛とアンガージュ  
マンの相同性がここにも認められることは注目に値するが、それが否定ない  
しアイロニーを通じて現れている点にも思いをいたさなければならない。  
ファビヤンは英霊たちとの連帯から半ば憑依されたかたちでひとり反抗の狼  
煙を上げることになるが、文字どおり同一性を失った彼の反抗が過去の再演  
にとどまり、夢遊の状態、なかば虚構の次元で行われているところ、またア  
ンガージュマンの手前にとどまる軸足が語り手の行動によって担保されてい  
るところに、イデオロギーから脱した作家の立ち位置の変化が見てとれるか  
らである。

## 同性愛とアンガージュマン

さて、『命令破棄』と『アルキュオネ』は、一方はソヴィエト共産主義へ  
の賛同、後者はレジスタンスへの参加という違いはあるにせよ、いずれも作  
家のアンガージュマンの指針と経験が色濃く反映された作品であるが、そう  
いった「ミリタリスマ戦闘的態度」がはっきりと否定されたのは1958年の『力線』にお  
いてである<sup>36)</sup>。この著作はエルバルの数ある自伝的作品のなかでも、とり  
わけ政治活動と「具体的で […] 社会的な経験」に照明を当てたものであり、  
「事件をかぎつける生来の感覚」に導かれて同時代の騷擾の現場に立ち会っ  
た者ならではの、歴史的証言としても価値をもつ<sup>37)</sup>。その意味で「参加の文  
学」に連なる作品と捉えることもできそうだが、ただし本作にかんして注意  
すべきは、冒頭からアンガージュマンそのものへの疑義と反省が口にされ、  
無償性への志向がすでにして打ち出されている点である。「私は、二十年来、

自分がどのようなメッセージを人類に届けることができるのか探求している。『メッセージ』という考えは、私の実存をひどく片端にしてしまった。皆と同じく、私も共産主義から始めたのだ。これは急いで白状しておいたほうがいいだろうが、経験の成果は期待外れのものとなった」<sup>38)</sup>。北アフリカ、インドシナ、占領下のフランスなど各地を巡る本書において、じっさいソヴィエトの章には多くのページが割かれている。党人としての活動、独裁を匂わすさまざまな事件、上流・下層それぞれの生活の実態など、否応なく〈公〉や政治的大義にかかる話題が並ぶことになるわけだが、なかでもひととき我々の関心を引くのは、性・恋愛がらみの出来事であり、それらが上述の話題と同じレベルの「事件」として扱われている点にほかならない。じじつコミンテルンからマークされ、上司にモスクワをいったん離れるよう勧められた語り手＝エルバールは、訪れたクリミアの地で思いがけぬ出会いに見舞われる。

私は大きな不安を抱えたままモスクワを離れた。私の予感が間違ふことはめったにない。何らかの災厄 catastrophe を予想していたのだ。

恋 amour がやってきたのだ。「若い研究者たち」の保養所で、ひとの人生をすっかり空にしてしまうような存在 être と出会い、これによって自分が遠くへ導かれるであろうことがわかった。かつてコクトーが私に手紙でこう言ったものだ——「気をつけろ！ 君は坂に差しかかると重くなりすぎる」。そうだ、私は転げ落ちてしまうのだ。その後また登らなければならない、それができればの話だが<sup>39)</sup>。

ここで言われる「存在」とは、モスクワの科学研究所に所属する二十歳の学生、やがて「N」というイニシャルで呼称されることになる、同性の恋人のことである。つまり語り手は恋人の性別を明かすことなく「この存在 cet être」との情事を語るのであり、そこでの中性化／暗号化は、対政治的な検閲避けというだけでなく（じっさい彼は恋人が当局の「人質」に取られることを恐れている）<sup>40)</sup>、パトリック・デュビュイが指摘するように、抑圧と自己検閲を前提とした「同性愛文化」から多分に演繹されてくる、同性愛文学の担い手に特徴的な「隠蔽と不決定の技法」の最たるものとして捉えられる<sup>41)</sup>。また「N」との恋愛には、「災厄」という、エルバールの同性愛のもう一つの様式が喚起されている。『黄金時代』や『階段』のなかでほのめかされているように、それは「情熱」と「嫉妬」に取り憑かれた状態、「疑

いの地獄」に陥るあまり自分だけでなく相手をも破壊しかねない危機的状況、そしてそれらの当然の帰結として待ち受ける悲劇的結末の謂いであり、エルバルにとっては、束の間の「幸福な愛」に対して支払うべき「恐ろしい」代償をなすものである<sup>42)</sup>。じっさい『力線』の語り手もこうした恋愛の二面を表裏一体のものとして語るわけだが——「私はNに添うようにそっと寝そべり、両腕でその体を抱きしめた。[…] こうしていられるのがたとえ一時間でも、五分でも、一分でも、幸福 le bonheur なのだ<sup>43)</sup>——、それよりもここで注目すべきは、政治的大義に対するこの「愛」の位置づけにほかならない。一足先にモスクワに帰った「N」は、「試験」と「必修の研修」のためにキエフに呼び出され、そのあいだの不在が語り手に例の「災厄」をもたらすことになる。

即座の決断——私はキエフへ発つ。Nとの再会までに二週間も待つだって？ ありえない。こうした場合、何事も一人の人間の意志には負けるのだ。労働、家庭、祖国——うっちゃってしまえ！ ひとには他にやるべきことがある。契約など破棄されればいい、年老いた母親は死なせておけばいい、どのモレが平定 pacification を布告しようとかまわさない——もうたくさんだ！ 後でやるようにつとめよう、自分の仕事を終えるのも、埋葬も……旅も。まずはキエフへ行かねばならない。どんなことよりも、自分たちの愛を優先することこそ、人類の荣誉なのだ<sup>44)</sup>。

語りが普遍化され、物語の時間が語り手の現在のほうへ早送りされている。同性の青年との愛は、ソヴィエトでの公務だけでなく、戦時中の国家理念（ヴィシー政権が掲げた「労働、家庭、祖国」というスローガン）や同時代の政局・国際情勢（1955年にギー・モレ首相がアルジェリアの反乱鎮圧を号令したこと）よりも優先すべき問題として規定されるのであり、こうした「一人の人間の意志」による私的な決断が「人類の荣誉」に繋がるとされている。つまり大義よりも小義という『力線』の教訓が恋愛の話題をとおして先走って強く打ち出されてしまったわけだが、肝要なのは、エルバルにとって決して瑣末どころではない後者に、同性愛が組みこまれている点であり、そのことは本書の結末部で述懐される「本質的なもの」と響きあっているように思う。

ここで本書の実質的な意義が見えてきた。私がいまおおいに驚きなが

ら、かなりの気詰まりと少しの苛立ちをもって気づくのは、自分がまるで偶然のように、偉大な仲間とともに、犯罪の現場に居合わせ、自分は無実であったにもかかわらず、そこでの犯罪を告発したというよりもおそらく引き受けたのだらう、ということだ。こうした不運は、私の歳の頃の人間たちにとっての敗北線 *la ligne d'échec* をなすものだ。私が本書で報告しなかったのは、この線のことなのである。軽快に振る舞えない者たち、それこそが我々なのだ——なぜなら、これは私の望むところだが、ひとは本書をとおして明るみになるその線に掴まされはしないだろうから。

私の同時代人たちは滑稽にもその線を自慢にするのがつねである。私は、違う。むしろ恥ずかしい。もし明日私にそうするだけの力があったなら、私の愛する存在への愛にそれだけの価値があったなら、私は軽やかな心をもって世界を飛び越えることだろう——かまいはしない、我々は卑小な庶民なのだから！

「いったいなぜ？」

「なぜなら我々は本質的なものから気を逸らされているからだ」

「愛する女のことか？」

「愛する存在から『気を逸らす』がままになっている者は生きる資格すらない。いや、本質的なものとは、私にとっては、別のことだ、本質的なものとは……」

「いったい何だね？」

「私には定義できそうにない。むしろ物語を語ることにしよう」<sup>45)</sup>

エルバルはここで自らの闘士としての活動を否定している。〈歴史〉の現場に立ち会い、時にそこでの不正や欺瞞を告発してきた一連の冒険は、「敗北線」をなすものだと言明しているのだが、それは自己批判というだけでなく、政治・イデオロギーの闘争に明け暮れた同時代の活動家たちへの非難にもなっている。そして「敗北線」の対極に「愛する存在への愛」があり、先に見たとおり、この「存在」とは、同性の恋人を指す符牒であった（「愛する女」と峻別されていることに注意しよう）。「もし明日私にそうするだけの力があったなら […]、私は軽やかな心をもって世界を飛び越えることだろう」という述懐は、「世界」より自分たちの「愛」を優先するという荣誉ある宣言であり、条件法で言われていることから、それができなかった過去への悔恨にほかならない（じっさいソヴィエトを後にしたエルバルは「N」

の身柄を案じて自ら連絡を絶ったのだった)。したがって、つづく断言的な命題——「愛する存在から『気を逸らす』がままになっている者は生きる資格すらない」——は、先に引用した「人類の榮譽」と対偶の関係になっているわけだが、ここで問題なのは、「愛する存在への愛」(＝同性愛)と「本質的なもの」との関連性である。「N」との恋愛を「本質的なもの」に組みこんで解釈する論者もいるが<sup>46)</sup>、この引用の記述を見るかぎり、曖昧と言わざるをえない。ここでの「本質的なもの」は、政治的なもの、大義に囚われて膠着した状態(「軽快に振る舞えない人間たち」)、アンガージュマンの結果としての「敗北線」に対置されており、その「線」に陥らないために注視・保持しておくべきものと見なされている。その意味で同性愛は「本質的なもの」の構成要素になりうるものの、我々がいままで見てきたように、〈同〉と〈他〉、〈私〉と〈公〉(「一人の人間」と「人類」)、「幸福」と「災厄」といった、二つの領域にまたがり両者を繋いできたその役割からすれば、特別な地位を要求しうるものでもあり、そのことが引用箇所の不決定な言い淀み——「いや、本質的なものとは、私にとっては、別のことだ、本質的なものとは……」——に通じているように思われる。以上のような「敗北線」の喚起と「本質的なもの」の示唆ののちに、本書のタイトルをなす「力線」の定義、つまり最終判決が呈示されることになるが、そこでは故意の言い落としがなされている。

これが私の力線だ、シンガポールの猿たちがいる公園を經由し、『ドゥラキーヌ將軍』〔セギュール夫人による1863年発表の童話〕を売りさばっていた少女を經由する線であり、人生に意味を与えてくれる線だ。そうだ、まさにそういったことであり、私はそれを追いかけるのをあまりに頻繁に諦めてきたのだ、次のような些細なことにかかずらうために——植民地化、共産主義、スペイン戦争、レジスタンス。私が何を知っていますか？<sup>47)</sup>

同性愛がここでは抜け落ちている。保留されていた「本質的なもの」の具体例が挙げられ<sup>48)</sup>、政治的大義がはっきりと「些細なこと」に帰されているにもかかわらず、恋愛・感情生活に関することは隠蔽され、「人生に意味を与えてくれる線」あるいは「私はそれを追いかけるのをあまりに頻繁に諦めてきたのだ」といった述懐によって、「N」だけではない数々の少年たちとの恋愛、つまりは束の間の幸福と悲劇的結末の合わさった一連の情事をほの

めかすにとどまっている。エルバールにおける同性愛の両義的地位の喚起というだけでなく、デュビュイが指摘した「隠蔽・暗示・不決定」の機制がここにも働いているといえよう。

## 結論に代えて——ゲイ文学としての可能性

以上のように、エルバールにおける同性愛の主題を、伝記的事実と主要作品の読解をつうじて論じてきた。問題としたのは、政治参加・作品執筆・感情生活にまたがった作家の多岐にわたる活動と、その反映としての作品世界のなかでの、同性愛の位置づけということになろう。同一性とコミュニティの形成、非連帯者の連帯からアンガージュマン、政治的なものと本質的なものの対立の乗り越え、いずれもの媒介となる同性愛は、〈私〉と〈公〉双方の圏域を確立・結合・相対化し、いうなれば個人と社会の対立という近代的問題——第三共和政下では個人主義と集団的価値の相克、両者の折衷の可能性の問題<sup>49)</sup>——の調停役を担うわけだが、それじたいスペクトラムを呈し（同士愛、性愛を含む実体的な同性愛、サド＝マゾヒズム）、また両個性を帯びるものでもあり（「幸福な愛」と「災厄」）、そうしたニュアンスを含む様態が上述の機能の振れ幅に対応してもいる。

本稿はこのようにエルバールの同性愛の様式と役割を概観したわけだが、むろんこれをたたき台に、個々の作品ごとのより掘り下げた各論が必要になってくるであろうし、同じ主題を共有する同時代の作家たち、ひいては（男性）同性愛文学の主題系との関係性に注視した論究が展開されるべきであろう。二十世紀フランス文学における男性同性愛の出現を体系的に論じたパトリック・デュビュイは、作家のドミニク・フェルナンデスが提示した「同性愛文化」のコンセプトを批判的に継承しつつ、「同性愛文学」——実質的には「男性同性愛文学」であり、広義の「ゲイ文学」——を「主として同性愛者によって書かれた、主要なテーマを同性愛とする、差別化されていない読者に宛てられた文学」と定義づけているが<sup>50)</sup>、その範疇の作家としてエルバールを取り上げている。幸福な同性愛、純粹主義、子供（時代）の特権視といったトポスにエルバールがどのように寄与しているかを論じ、同性愛文学の「表現の技術」にかんしては、「エルバールの作品は暗示と隠蔽の境界についての研究にかなり適している」として、『アルキュオネ』と『力線』を例にとり、その独自性を認めている<sup>51)</sup>。デュビュイの指摘は本稿でも一部援用したが、今後も重要な参照点となるだろう。作品ごとのより精緻な検証

だけでなく、コーパスを広げての敷衍可能性の検討も必要であろうし（デュビュイが取り上げているのは上記二作品のほかに『放浪者』『黄金時代』『ユニコーン』のみである）、また彼が手短かに言及したコクトーとの主題的連関<sup>52)</sup>についても埋めるべき余地がある。

加えて我々の検討課題としてあるのは、ジッドとの関係である。フィリップ・ベルティエはエルバル的同性愛の特徴として、戦闘性の欠如、罪障性の不在、聖性の光輝の三つを挙げたが、前の二つにかんしては、彼も的確に指摘しているとおり、ジッド的同性愛との関連（継承と批判）によって検討されなければならない<sup>53)</sup>。エルバルとジッドとの関係は、実人生だけでなく作風・思想の面においても無視できぬものであり<sup>54)</sup>、同性愛をめぐるスタンスもまたその例外ではない。とくに同性愛と家庭の問題にかんしては、両者の両立可能性を彼らがともに模索していたふしがあり、それはエルバルがジッドのホモペアレント的試みに参画していた事実のみならず、後者が『贖金づくり』などで示した同性愛者への親権の移譲というヴィジョンを前者が発展的に受け継いでいる点からもうかがうことができよう<sup>55)</sup>。我々としてはこういった個別の問題を取っ掛かりに、師弟関係とも目される両者の観点の共有と相違、一方のもたらす影響と他方の批判的継承の実態に迫っていきたいと考えている。

## 注

- 1) François Ouellet, « Pierre Herbart : Une ligne de force littéraire », in *ROMAN 20-50*, hors série n° 3, Presses Universitaires du Septentrion, décembre 2006, pp. 49-50.
- 2) エルバルの美貌と人柄の魅力についてはジッドやマルタン・デュ・ガールなど幾多の証言があるが (Maria van Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, tome II : 1929-1937, Gallimard, 2001, p. 150, p. 154)、晩年の肖像は批評家のマチュー・ガレの『日記』に驚嘆をもって描かれている (Matthieu Galey, *Journal : 1953-1973*, Grasset, 1987, p. 95, p. 156, p. 440)。また、後述するようにジッドはエルバルを『法王庁の抜け穴』の主人公ラフカディオの化身と見なし、一方作家で本人とも親交のあったアンリ・トマが実際にエルバルを主人公にした小説をものしている (Henri Thomas, *Le Goût de l'éternel*, Gallimard, 1990)。
- 3) Marc Dambre, « Pierre Herbart (1903-1974) : D'une escorte l'autre », in *La Revue littéraire*, Le Texte et l'Édition, 2000, p. 142.
- 4) エルバルの受容史と再評価については以下を参照。Paul Renard, « La revue littéraire de Pierre Herbart : "Escorte" et "ligne de force" », in *ROMAN 20-50*, *op. cit.*, pp. 5-6 ; Marc Dambre, « Une bonne situation », *ibid.*, pp. 7-15.
- 5) ガリマール社の文学愛好者向けの叢書 (« Cabinet des Lettrés ») から『命令破棄』、

- 『アルキエオネ』、『黄金時代』、『ユニコーン *La Licorne*』、『想像的記憶』、『アンドレ・ジッドを求めて *À la recherche d'André Gide*』、『ソヴィエトにて *En U.R.S.S.*』、『見出されたテキスト *Textes retrouvés*』（遺稿集）、『われら階級脱落者を求め *On demande des déclassés*』（論説集）の九点が上梓されており、また同社の別の叢書（« *L'Imaginaire* »）から『力線』が2011年に、グラッセ社からは『秘密の物語集』が2014年に再版された。
- 6) Jean-Luc Moreau, *Pierre Herbart : l'orgueil du dépouillement*, Grasset, 2014.
  - 7) Alain Moreeews, *Pierre Herbart, cinématographes et colonies (1903-1974)*, L'Harmattan, 2017 ; *Pierre Herbart : L'Ordre réel et l'homme du Niger (1903-1974)*, L'Harmattan, 2018 ; *Pierre Herbart : De la drôle de guerre à la libération de Rennes*, L'Harmattan, 2022.
  - 8) Phippe Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, Centre d'études gidiennes, 1998.
  - 9) Cathrine Douzou, « Pierre Herbart et André Gide, écritures d'un soi marginal », in *Études littéraires*, vol. 36, n° 3, Presses de l'Université Laval, 2005, pp. 125-136.
  - 10) Sylvie Patron, « Pierre Herbart ou la vie ironique ». *Critique*, n° 624, Éditions de Minuit, mai 1999, pp. 418-432 ; Éric Bordas, « Les Phrases "simples" de Pierre Herbart », in *ROMAN 20-50, op. cit.*, pp. 59-71.
  - 11) François Ouellet, « Pierre Herbart : Une ligne de force littéraire », in *ROMAN 20-50, op. cit.*, pp. 49-58 ; repris dans *La Littérature précaire : De Pierre Bost à Pierre Herbart*, Éditions Universitaire de Dijon, coll. « Écritures », 2016, pp. 133-141.
  - 12) 2019年5月、エルバールの「作家」ならびに「レジスタン」としての功績を記念してパリ七区の「小路 allée」に彼の名が冠されることになったが、その竣工式の祝辞において作家のシャルル・ダンジはエルバールの肩書きに「同性愛者」を加え、男性同性愛者＝対独協力者という風説を払拭するように、この作家が「ゲイ」としてレジスタンスに参加した貴重な一人であることを喚起した。Charles Dantzig, « Charles Dantzig rend hommage à Pierre Herbart, écrivain, homosexuel et grand résistant », *TÊTU*, 23 mai 2019 [en ligne] : <<https://tetu.com/2019/05/23/charles-dantzig-rend-hommage-a-pierre-herbart-ecrivain-homosexuel-et-grand-resistant/>> [consulté le 25 octobre 2022].
  - 13) この章の伝記的記述については前掲のモローの評伝 (*Pierre Herbart : l'orgueil du dépouillement*) の他に以下を参照した。Moreau, « De la marge au centre », préface des *Histoires confidentielles*, Grasset, coll. « Les Cahiers rouges », 2014, pp. 7-20 ; P. M., « Note biographique », dans les *Textes retrouvés*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 1999, pp. 119-148.
  - 14) Herbart, *Ligne de force*, Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2011, p. 13. 1958年の時点で「まさしく反植民地主義に酔いしれた状態で北アフリカから帰った」と当時を回想するエルバールは、いまなお「私は抑えがたいほどに反植民地主義者である Je suis incoerciblement anticolonialiste」と言明している。
  - 15) Rysselberghe, *Les Cahiers de la Petite Dame*, tome II, p. 156.
  - 16) *Idem*.

- 17) *Ibid.*, p. 241. なおエルバルの側からも証言がある。「彼〔ジッド〕にとって何を“私は表象していた”のか？ いま思えば当初から（私は二十五歳だった）、彼は私をラフカディオと取り違えていて——これは誤解だった——、そうした見方を変えることがなかった。『ギョーム〔作中でのエルバルの名〕は何でもできる』と彼はよく言っていた。誰に対しても、たとえ間抜け女であろうとも、そう言っていたので、私は人殺しと見なされ、おかげで楽しませてもらったものだ」（*Souvenirs imaginaires*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 1998, p. 99）。なお「人殺し」というのは、ラフカディオが作中で「無償の行為 *acte gratuit*」の実践として列車から見知らぬ男を突き落としたことを指す。
- 18) ラフカディオ自身が『法王庁の抜け穴』において、南イタリア旅行の思い出を語る際に、「十四から十六歳くらいの、それより上ではない」ある美少年への関心を口にしている（*Les Caves du Vatican*, dans *Romans et récits : Œuvres lyriques et dramatiques*, vol. I, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, pp. 1129-1130；アンドレ・ジッド／三ツ堀広一郎訳『法王庁の抜け穴』、光文社古典新訳文庫、2022年、330頁〔上の訳文は原文に合わせて改変してある〕）。この「少年愛的な一節」を真っ先に指摘し、批判したのはカトリック作家のポール・クローデルであった（André Gide-Paul Claudel, *Correspondance : 1899-1926*, Gallimard, 1949, pp. 216-228）。
- 19) 「ホモペアレント性 *homoparentalité*」は「少なくとも一人の親が同性愛者の自覚をもつ家庭の状況」を指すが、この新しい家庭のあり方とジッドとの関連については、以下の拙稿を参照のこと。「アンドレ・ジッドと『ホモペアレント性』」、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』、第64輯、第2分冊、早稲田大学文学研究科、2019年、245-258頁。
- 20) Renard, « La revue littéraire de Pierre Herbart : “Escorte” et “ligne de force” », *op. cit.*, p. 5；Dambre, « Une bonne situation », *ibid.*, p. 13；Bruno Curatolo, « Souvenirs imaginaire : Le mentir-vrai de Pierre Herbart », *ibid.*, pp. 73-74.
- 21) Moreau, *Pierre Herbart : l’orgueil du dépouillement*, pp. 136-137, pp. 163-165.
- 22) Herbart, *L’Âge d’or*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 2001, p. 13.
- 23) *Ibid.*, p. 15.
- 24) *Ibid.*, pp. 17-18.
- 25) Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, p. 42. ベルティエによれば、エルバル（的主体）が惹かれるのはたいてい「下層か周縁の階層にいる」、「女性的な趣き」と「明示的な男らしさ」を兼ね備えた少年たちであり、よって彼らとの交際は「過剰を排し、強烈であると同時に慎み深く、時に悲痛なほどの不器用さを帯びていること」を特徴とし、そこでの性愛のあり方——「エルバル的セクシュアリティ」——は、「たしかに小心翼翼としたものでもないのだが、どぎつい形では決してあられわず、垣間見と〔…〕、とりわけ軽い愛撫に特別な価値を置いて」おり（「肩にまわされる腕」、「キスの軽い触れあい」、「兄弟のように親しげな抱擁」、添い寝など）、エルバルが指針とした知性や人工性の介在しない直接的な欲望、純粋な感性の輝きを美とする態度に適うものであるという（pp. 84-86）。
- 26) *Ibid.*, p. 41.
- 27) Herbart, *Contre-ordre*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 2000, p. 31.

- 28) *Ibid.*, p. 32.
- 29) *Ibid.*, p. 37, p. 261.
- 30) *Ibid.*, p. 263.
- 31) *Ibid.*, pp. 260-261. こうしたサド=マゾヒズムは『黄金時代』のシチリア島での生活を語るくだりにほのめかされている。「その後の何ヶ月か、身を焦がすような情熱に取り憑かれた日々のことは語らずにおこう。僕はただわけもなく、嫉妬からくる激情にことごとく身をまかせていた。[...] いまや僕は破壊の欲望というものを経験していた。[...] 僕はその種の狂気を経験していたのだ。当初は、僕がその犠牲者であったけれど、その年の冬のシチリアにおいては、たしかに僕のほうが虐待者だった」(*L'Âge d'or*, pp. 111-112)。ここで言い落とされた島での経験は、『秘密の物語集』所収の『階段』のなかで、フランチェスコという現地の少年との交情をとおして描かれることになるだろう (*L'Escalier* [1957], dans les *Histoires confidentielles*, pp. 107-108)。後述するように、「破壊の欲望」からくるサディズムは、エルバールの同性愛の「災厄」的側面をなすものである。
- 32) *Contre-ordre*, p. 22.
- 33) この趨勢は当時のソ連の同性愛弾圧に抗して、個人の性的解放と人民の経済的解放の結合という党の最初の方針への立ち返りを主張するものにも見える。この問題については次が参考になる。Dominique Fernandez, *Le Rapt de Ganymède*, Grasset, 1989, pp. 75-77 ; ドミニク・フェルナンデス / 岩崎力訳『ガニユメダスの誘拐：同性愛文化の悲惨と栄光』、プロンズ新社、1992年、91-92頁。
- 34) 前述のとおりエルバールは戦時中ナチス主導の強制労働に抵抗する青年たちの脱走に手を貸していた。またレンヌ解放後の、「死んだ戦友たち」を蔑ろにするシャルル・ド・ゴールの無関心と横柄な態度に苛立っている (Herbart, *Ligne de force*, Gallimard, coll. « L'Imaginaire », 2011, pp. 148-149)。
- 35) Herbart, *Alcyon*, Gallimard, coll. « Le Cabinet des Lettrés », 1999, p. 56.
- 36) フランソワ・ウエレは「文学のレフェランスが政治的なものを駆逐している」事実から『力線』を「戦闘的態度の拒否」と「アンガージュマンに対する文学の優位」を表明した画期的著作と評している ( « Pierre Herbart : Une ligne de force littéraire », *op. cit.*, pp. 50-51)。
- 37) *Ligne de force*, p. 13, p. 52 .
- 38) *Ibid.*, p. 11.
- 39) *Ibid.*, pp. 100-101.
- 40) *Ibid.*, pp. 107-108. 同じ理由からエルバールは帰国後も次のような苦渋の選択をせざるをえなかった。「さらなる責め苦が私を待ち受けていた。Nが手紙を書いてきたのだ。[...] 私はといえば、返事をしなかった。ごく短い通知であっても、Nの自由を、おそらくは命を奪いかねなかったからだ」(p. 125)。
- 41) デュビュイは抑圧による新たなエクリチュールの創出 — 同性愛への社会的抑圧が作家に同性愛文学の「表現の技術」を産み出させる — という機制を認め、とりわけ二十世紀初頭においてはそれが「隠蔽」「暗示」「置き換え」といった形で顕著に現れるとして、個々の作品を比較検討している。そのうえでエルバールを「隠蔽と不決定の技法がもたらす可能性の偉大なる開拓者」と評しながら、『力線』での試みを「愛

する者のことを女性形・男性形を一切使わずに喚起するという文法上の壮挙」と讃え、「イニシャル」や「短い婉曲表現」の駆使と性数一致の巧妙な回避により、作家が「一種の中性」を発明したと結論づけている (Patrick Dubuis, *Émergence de l'homosexualité dans la littérature française d'André Gide à Jean Genet*, L'Harmattan, 2011, p. 241, p. 254)。なおデュビュイが (一部批判的に) 参照する「同性愛文化」は、ドミニク・フェルナンデスの定義によるものである。「同性愛を隠蔽したり間接的な手段で描いたりしなければならないために、やむなく作家が暗示的な言語を創造するときには、『同性愛文化』はありえない」 (Fernandez, *Le Rapt de Ganymède*, p. 233 [『ガニユメスの誘拐』, 288頁。上の訳文は原文に合わせて改変してある])。先に引用した『命破棄』と『アルキユオネ』における少年どうしの秘教的な共同体もまた、こうした「同性愛文化」の文脈で把持されなければならない。『力線』における同性愛の符牒化と無関係ではないだろう。

- 42) 注 31 を参照。
- 43) *Ligne de force*, p. 122.
- 44) *Ibid.*, p. 102.
- 45) *Ibid.*, pp. 151-152.
- 46) Jean-François Domenget, « Pierre Herbart anticolonialiste : *Le Chancre du Niger* », in *ROMAN 20-50, op. cit.*, p. 26.
- 47) *Ligne de force*, p. 154.
- 48) いずれの例も日常的で見かけ上些細な無償の出来事であり、エルバルにとっては芸術・文学の領域に通ずるものであろう。いみじくもウエレは、文学作品 (『ドゥラキース将軍』) も参照されている引用箇所から、「生活と文学の側につく固い決意」を読みとっている (« Pierre Herbart : Une ligne de force littéraire », *op. cit.*, p. 51)。
- 49) たとえばジッドはこの同時代の問題を深刻に受けとめ、とりわけ『背徳者』(1902年)において、少年愛的傾向をもつ「個人主義者」の社会統合の問題——すなわち自らの問題——として再提起していたが、こうした問題意識をエルバルがどれほど共有していたかが今後の争点となるだろう。ジッドにおける件の主題については、次の拙稿を参照のこと。「La question de l' "association" dans *L'Immoraliste* de Gide », 『フランス語フランス文学研究』, 第 107 号、日本フランス語フランス文学会、2015 年、71-88 頁。
- 50) Dubuis, *Émergence de l'homosexualité dans la littérature française d'André Gide à Jean Genet*, p. 295.
- 51) *Ibid.*, pp. 251-252, p. 254.
- 52) 「純粋主義 angélisme」とそれに即した登場人物の造形にかんして、二人の作家の親近性を指摘している。*Ibid.*, pp. 181-183, pp. 203-204.
- 53) Berthier, *Pierre Herbart, morale et style de la désinvolture*, pp. 86-88.
- 54) 両者の関係性を論じたカトリーヌ・ドゥズーは、『黄金時代』と『想像的記憶』を読めばエルバルの「作品がどれほどジッドのそれとの比較に耐えてきたにちがいないか」がわかるとし (« Pierre Herbart et André Gide, écritures d'un soi marginal », *op. cit.*, p. 135)、またこれを受けてウエレは、「アンガージュマン」と同様、こうした「ジッドとの比較」が作家としてのエルバルを不利な立場に追いこみ、その正当な評価の

妨げになったのではないかと推測している (« Pierre Herbart : Une ligne de force littéraire », *op. cit.*, p. 50)。

55) 「アンドレ・ジッドと『ホモペアレント性』」、前掲書、252-254 頁。